岸和田の林業

林業の歴史

日本では古代から現代まで長い歴史のなかで、森林や木を上手に利用してきました。森林を失わないように守る努力を続けてきました。
日本各地に木材を生産する林業地が誕生したのは豊臣秀吉の時代、16 世紀といわれます。

江戸時代になると、木材は貴重品となり、このころから森林の保護や森林づくりにも力を入れるようになりました。

明治時代には、国や都道府県により特別に管理される保安林制度ができました。岸和田市でも、葛城山や神於山では、こうした保安林があります。保安林には、土砂の流出を防ぐためのものや、水源を養うもの、人の心身の健康増進に役立つものなどがあります。

林業はそんな山や森林を守り、生活を豊かにする木材を生産する営みです。

森林の持つ力

水を蓄え洪水を防ぐ
➡ 山崩れを防ぐ
空気をきれいにする
➡ 二酸化炭素を吸収する
（森林が元気でなくなると地球温暖化が進みます）
水をきれいにする
➡ 生き物のすみかとなる
木材を生産する
➡ 伝統文化を守る

豊かで元気な山や森林は、たくさんの生き物の命を育んでいます。そして、その山や森林を守ってきたのが林業です。今林業者数が激減し、山や森林を守る者がいなくなってきています。

山や森林を守ることは、都市や海を、すべての地域を守ることにつながっています。

間伐などの手入れがされた森林

治山治水

治山とは、荒れている山を植林などで整備することで、治水とは、河川の氾濫や洪水などの災害を防ぎ、水をかんがいや発電などに利用することです。

岸和田市林業活性化協議会・森林組合

岸和田市林業活性化協議会は、岸和田市地域の森林管理・林業の活性化を目指し、大阪府森林組合が行う業務について話し合い、大阪府・岸和田市などと連携をしながら林業振興をはかるため、森林の所有者などで組織し活動を行っています。

森林組合は、森林の所有者が、森林の保全や林業に関わる事業を共同で行うために設ける団体で、協同組合の一種です。日本では森林組合法に基づいて設置されています。

NEWS

山滝中学校の学校林管理活動

大沢町の転法輪寺から山道を進み、斜面を上ったところに山滝中学校の学校林があります。

終戦間もない頃に、「荒れ果てた郷土の山に木を植え、山を緑にすると共に、木が大きくなって伐採して売れたら中学校の教育のために使おう」と昭和26年に話が決まり、地元の方、PTA、３年生でヒノキを植栽したことが始まりです。平成７年度まではPTAが中心となり、それ以降は１年生の体験活動として管理が行われてきました。指導するのは、学校ボランティアで山滝中学校の卒業生、岸和田市林業活性化協議会の会長でもある田中豊秋さんです。

田中さんは、森林の管理は、山を守るだけではなく、山裾の農地や町の暮らし、そして海を守ることにつながることと考え、さまざまな岸和田市のボランティアや環境活動に協力しています。

神於山の自然再生

神於山は、雨乞いや、農業用の肥料、薪を採取する山として大切にされてきましたが、時代の変化とともに人の手が入らなくなり、タケやツルがはびこる状況になっていました。平成10年に神於山の保全活動に取り組むプロジェクトに着手することになり、平成15年に神於山で大阪府植樹祭が開催されたことを機に、地元町会やボランティア団体、農林漁業関係団体、企業や行政などの団体が集まって、「神於山保全活用推進協議会」を発足させ、神於山の保全再生に取り組んでいます。

豆知識

古代から私たちの先祖の人々にとって、神於山は神様のおられる山という名前のとおり、神様が自分たちの守っている地域をながめる山として、山そのものが崇拝の対象となっていました。また神於山は、生命の根源である水とも深い関係があり、昔、神於山に源を発する春木川・天の川が水田耕作に利用できた唯一の流水であったことからも大切にされていました。